

私のおすすめ この1冊！

設計原則からトラブル対応までの臨床ガイド パーシャルデンチャーを得意になろう！

五十嵐順正・若林則幸 編著

A4 変判・176 頁・定価 7,980 円（税込）

2013 年 2 月 26 日 ヒョーロン・パブリッシャーズ刊

長濱裕介

（東京都新宿区／はらまちグリーン歯科クリニック）



近年、学会や講演会において欠損補綴をテーマとして取り上げられているもののほとんどがインプラント関連であろう。また義歯の話題としては、総義歯の作製方法が多数である。どちらも欠損補綴においては術者の診断能力、細かな手技のクオリティの向上を図り、患者さんにより良い治療を提供するためには欠かせないものである。しかし、欠損補綴で最も苦慮することは個別診断であり、それに伴う補綴設計である。インプラントや総義歯も補綴設計のひとつの選択肢であるが、パーシャルデンチャーはバリエーションが多彩で形態を決めるのに悩まされる。

本書は、私の臨床における悩みの解決策となるべく、様々な観点からパーシャルデンチャーの設計が述べられている。その中でも、最も使用頻度が高くスタンダードなクラスプデンチャーに焦点を当てており、一般臨床に適った内容である。冒頭に「クラスプデンチャーには多くの利点がある反面、安易に適用するとかえって口腔内の健康と機能を損なう場合がある」と述べられている。私はこの考え方が、義歯を設計するに当たり最も重要ではないかと思う。快適に咀嚼を行うことができ、支台歯の状態を長期的に安定させ、破損

も防ぐことができる義歯を作製することが理想である。そのための細かな設計についてが詳述されている。

まず、支持、維持、把持を確立し、義歯の安定を図るためのクラスプの設計である。レストの位置、レスト座の形成基準、ガイドプレーン、大連結子、間接支台装置の設計、維持鉤腕の形態、支台歯の歯冠形態の修正など、義歯の安定にかかわってくる事柄が事細かに述べられている。当たり前のことと高をくくる先生もおられるかもしれないが、クラスプデンチャーにおいては、最も重要なことである。義歯の不満を訴えて来院される患者さんのほとんどは、前述した中に問題点がある。レスト座が形成されていない、遊離端欠損において間接支台装置がない、酷いものではレストそのものがなく、ワイヤークラスプで維持のみしか機能していないものまでである。このような設計の義歯を「合わない」と言った患者さんが、「インプラントにしましょう」と言われ、転院してこられる。こんな事態を避けるためにも今一度、基本的事項を見直す上で、本書は最適な内容である。

次に、様々な欠損形態に対応した設計について症例を通して解説しているが、パーシャルデンチャーの場

合、クラスプデンチャーひとつをとっても欠損形態により多種多様である。特に遊離端欠損の場合は義歯の動態、支台歯にかかる力の負担や方向を考慮して設計を行うため、レストや間接支台装置の位置、大連結子の設計に留意しなければならない。この様々な欠損形態に対する設計を症例として口腔内写真とイラストで解説されているため、自分自身が治療を行ったような疑似体験として記憶することができ、同じような患者さんが来院された時に取り組みやすいのではないかと思う。

また最も難解だと思われるすれ違い咬合の症例も記載してある。すれ違い咬合の場合、義歯の安定を図ることがクラスプデンチャーでは特に難しいが、クラスプデンチャーでの対応例も4症例紹介されており、貴重な疑似体験を行うことができた。

基本的な事項から様々な欠損症例への対応まで解説された多彩な内容であり、学生時代や卒直後に学んだ知識の復習になる部分もあるが、実際に臨床を行い、経験を積んだ上で読むことで、本書から得られる知識の重要性が再確認できるのではないだろうか。ぜひ今度は、同じような欠損形態に対して個別対応を行った症例の設計を疑似体験してみたい。